
サムシング ブルー

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サムシング ブルー

【Nコード】

N7007P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

「私、またケツコンするのよっ」

バツイチの凧子と、そんな彼女に長年片想いをしている隣の真潮との長い恋の行方。

海の近くの街を舞台とした物語です。

前編・後編となります。自サイトでも公開中。

前編

花嫁が、結婚式の時に身につけると幸せになれるという、『四つのサムシング』ってヤツがあるらしい。

サムシング ニュー

サムシング オールド

サムシング ボロウド

そして

サムシング ブルー

「真潮^{ましお}っ！」

でっかい声が、頭上からブンと落ちてくる。

俺は、迷わず声の方を見上げた。

「馬鹿でっけー口！」

アハハと笑いながら二階の窓から顔を出しているのは、隣に住む
凧子^{なぎこ}だ。

頭には、ふわふわのレースなんかを載せている。

「アンタさあ、それ何さ。で、何してんの？」

同じ年のお隣さんは、相変わらず能天気^{なまけな}に毎日を過ごされている
ようだ。

「えへへっ」

顔の前に垂れてきているバサバサとした長い髪を気にもせず、凧
子は俺を見下ろしていた。

レースの布と長い髪がハラハラと垂れ下がり、まるでグリム童話
に出てくる、なんとかという姫のようだ。

「綺麗でしょ？ これね『ウエディング ベール』なんだっ」

なんだっ？ 今、アイツ。『ウエディング』って言ったか？

「私、またケツコンするのよっ」

「はあ？」

お隣の青柳 凧子サンは、既に『バツイチ』のご身分であった。

「ねえ、田中 真潮くん。花嫁が、結婚式の時に身につけると幸せになれるっていう四つのサムシング、知っている？」

「四つのサムシング？」

「やれやれと仕事から帰ってきたと思ったら、今度は凧子サマのお相手だった。」

近所の商店街にある馴染みの居酒屋で、俺らは飲み始めた。

凧子は夕食が済んでいた様で、形ばかりの中ジョッキを目の前に置いてちびちびと飲んでいた。

「そう。サムシング。それ知らなかったなあ。だからダメだったのかなあ」

呆れた気持で、『鳥軟骨のから揚げ』をパクつく。

「違っただろうが。アンタがケツコンした、『大学時代の先輩』とやらには結婚前から半同棲の彼女がいて、結婚後も切れてなかったんだろうが、って。」

だから、たとえいくつサムシングを揃えていたところで、あの結婚はダメだったんじゃないかって。

「まあ、ケツコンなんて、『宝くじ』みたいなもんだしな」

「気休めにもならない事を言いながら、箸で『ピリ辛ねぎサラダ』をつつく。」

白髪ねぎがシャキシャキとしていて、たまらなく美味い。

「でね、真潮。今度の彼は、凄く真面目そうな人なんだあ」

「ハイハイ、と思う。『真面目そうな人』ね、と。」

「たしか、お別れしたダンナサマの事は『誠実な人だ』って言うてたよな。」

「ワシ、アンタの国語表現力を信じてないから」
大ジョッキのビールに口をつける。

グラスは白く曇るほど、キンキンに冷えていた。
ピリピリと冷たく喉にくる、こんなビールは最高だった。

「私の国語表現力って何よ」

不機嫌そうな顔をして、凧子が無造作に自分の髪をスーツといった。

その仕草から目をそらす様に、僕は壁に張ってあるメニューを見る振りをした。

「あつ。『タコキムチ』だつて。凧子もキムチ好きだよな」

通りかかった店員さんに、追加注文をした。

「で、何よ。その表現力って」

凧子の言葉に、ぎゅっとビールを飲む。

「国語2」

凧子のはつきりとした二重の目が、どんぐりみたいに大きくなった。

「なにそれ」

「アンタの中高の成績」

「そんな昔のこと」

「いや。アンタの悲劇は、そこにあると俺はみてるけど」
早速運ばれてきた『タコキムチ』に箸をつける。

「つまりさ。『言葉』っていうのは『パワー』がある訳よ」

「また、ウンチクですか？ センセ」

確かに俺は、『センセイ』してます、中学校で国語の。

「そうそう。まあ、聞きなつて。つまりさ、言葉を口に出すとそれが耳に入るだろ？」

「センセ。『耳』以外の場所に入ったら困ります」

「アンタ、うるさいよ。で、それが耳に入ると、当然脳みそがその『言葉』を聞いちゃう訳だ」

「何を」

「つまり『あの人は、真面目なそんな人よん』ってさ」

「別に、いいじゃない」

「そうすつとさ、脳みそは情報としてインプットしちゃうんだよ、

『何がし佐助くんは、真面目そんな人よ』ってさ」

「彼。『佐助』って名まえじゃないけど？」

「まあ、名まえは何でもいいのつ。で、脳みそにその情報が保存されると『ウエルカム。風子の勘違いワールドへ』って運びになる訳さ」

「よくそんな『ほら話』が、次から次へと浮かぶわねえ。真潮って

「ほらほら、そういうことを言つと『ほら吹き真潮』って言うのが
あなたの脳みそにインプットされるでしょ？ 困るんだよね」

「もうっ！ ばかばかしいんだから」

「だあ、ねえ」

ホントバカバカしい会話だつていうのは、了解しております。

こんな実りの無い話を、わざわざあなたに話すなんてさ。

いくらこんな警告じみた事を吐いたところで、風子には少しも伝わりやしない。

いつだってバカみたいに、いい加減な男にひっかかって、拳句の果てに捨てられて。

風子の恋の歴史は、その繰り返しだ。

惚れっぼくて、男をすぐに信じちゃって、お人よしで鈍感で。

でも、悔しいけれど。

そんな風子がたまらなく可愛かった。

ずっと好きだった。

「まあ、誰とケツコンしてもいいけどさ」

独り言の様な台詞を吐いた。

風子が俺を見ながら、ちっとも減らない重そうなジョッキに、ちまっと口をつけた。

「ともかく、幸せになってくださいよ」

ホント、そうしてくれよ。

俺のモノになりやしないのに、ひらひらと舞い戻って来なさんなよ。

パーツとド派手に幸せになって、でもって、早く俺にアンタを忘れさせてくださいよ。

「バーカ」

そう言つと凧子は、幸せそうな顔をして、コトンとジョッキをテーブルに置いた。

お隣が、なんだかあわただしくなってきた。

二度目とはいえ、やはりおめでたい話はおめでたいらしい。

「凧子ちゃんみたいに、一人で二回する人もいるのにねえ」

母親は新聞紙の上で絹さやの筋を取りながら、俺の事をちらりと見た。

「真潮。あんたイイヒト、誰かいないの？」

そして今度は、俺をわざと見ない様にして聞いてきた。

「イイヒトねえ」

「何なら、お見合いでもしてみない？」

「はあ？」

「まあ、そういう話もあるってことよ。一応、考えておいてね」

さあてと、と母親は言いながら立ち上がると、筋がのった新聞紙をくるりと纏めて屑箱にポンと入れた。

「真潮」

「よお」

夜のコンビニで、凧子に会った。

凧子の持つプラスチックのカゴの中には、いくつかの種類のチョコが入っていた。

「チョコ女、健在だな」

にやり、と笑って凧子を見た。

「あつたば よ！ 新製品よ。見逃さないでしょ。しかも、コンビニ限定品」

威張ったように、凧子がカゴの中身を俺に見せてくる。

「真潮は、何か買いに来たの？」

「あーっ、と。雑誌、なんか適当にね」

「ふうん」

雑誌のコーナーに足を進める俺に、凧子もトコトコ付いてきた。

「進んでるの？ 『ご成婚』の準備とやらは」

社交辞令として、一応聞いてみる。

「ああ。そんな、直ぐにつて訳じゃないのよ、全然」

落ち着きなく、凧子がチョコしか入っていないカゴを揺らしていた。

俺は、雑誌の棚にあるスポーツ雑誌を手にした。

パラパラと雑誌の内容を見る。

「それ、買うの？」

凧子も俺に並んで、雑誌を捲りだした。

カゴはその細っこい腕に掛けられたままだった。

「どうすっかなあ」

そう言いながら、凧子の腕にぶら下がっていたチョコしか入っていないカゴをぶん取った。

「ありがと、真潮」

「どうイタバシ」

「イタバシ？ もうっ、バツ力ねえ」

ケタケタと凧子が笑う。

無邪気な笑顔を俺に向けて、凧子は隣に立っていた。

こんな、まるで『気のいいトモダチ』の役目なんかする自分に嫌気がさす。

コンビニの蛍光灯つてヤツはやけに明るいで、俺は自分の嘘がその光に暴かれやしないかって、冷や冷やとした。

「ねえ」

「なんだよ」

「真潮さあ、お財布、持ってる？」

「うん」

「実は、忘れちゃったんだ。私」

そう言つと今度は、悪戯そつな笑顔を俺に向けてきた。

コンビニを出入りする瞬間に鳴るチャイムの音に慣れてしまったのは、いつ頃からだろう。

最初は気になったこの音も、何度か来るうちに気にならなくなつた。

音つてモンはそんなモノなんだろう。

いつの間にか慣れて、いつのまにか馴染んでいる。

凧子は、一人娘だった。

上に姉が二人いる三人キョウダイのウチとは、随分様子が違った。

二人ともとづくに嫁に行った訳だけど、現役時代（？）の我家は、そりゃかましいと言うつか、うるさいと言うつか、大騒ぎだった。

それに比べて、凧子の家は静かだった。

ただ、朝の「行つてきます」と夜の「ただいま」の声だけは、俺の部屋にいても聞こえてきた。

凧子が一年と少し前に嫁に行った時は、当然の事だけどピタリと

その声はしなくなった。

凧子の声が聞こえない。

それだけで、隣の家はシンと静まりかえったように思えた。

調子が狂った。自分の生活から何かが欠けてしまったという虚無感があつた。

なのに凧子は、去年の秋にふらりと戻ってきては（まあ、離婚していた訳だけど）まるで結婚などしていなかったかの様に、以前と何ら変わりなく暮らし始めたのだ。

そしてまた、凧子は嫁に行くのだという。

このお嬢さんは（お嬢さんと呼ぶのも段々と微妙なお年頃だが）、一体何を考えて日々暮しているのだろう。

こっちのそんな気も知らずに、鼻唄なんか歌いながら凧子は俺の隣を歩いている。

『TSUNAMI』なんか、歌っている。

何だか、腹が立つ。

歌うなって、その歌をアンタが。

むしろその歌を歌うのは俺だろうが、って。

「波の音がするね」

鼻唄が止まって、かわりに凧子の声が出た。

さわさわと絹系みたいに、凧子の髪が海風に乗り、揺れ、闇に溶ける。

手を伸ばして掴まえたくなる。触りたくなる。

「ああ、そうだな」

凧子に答えた。

ザザザザ、ザザザという音が、くり返し耳に優しく響いた。

あのコンビニは、海に来た人を目当て建てられているので、俺たちが住む家よりも、若干 海に近かった。

海の音も強く聞こえた。

「なんかさ。ほっとするんだよね。波の音ってさ」
「ああ、そうだな」

波の音。凧子の声。
本当に、ほっとするよ。」

「ねえ。なんで波の音がほっとするか知ってる？ 田中センセイ」
悪戯な瞳を輝かせて凧子は俺を見る。

「たいていこういう表情のときは、凧子は答えを知っているのだ。
ん、そうだなあ」

ワクワクした表情を凧子は俺に向けてくる。

お姫様は、答えをお待ちの様だ。

「心臓の音に似ているとか？」
適当に答える。

「えっ？ そうかなあ。そうかもね。どうしよう」
途端にシュンとした顔に凧子はなった。

「なに。アンタ、答え知っている訳じゃなかったんだ」

「うん。今ね、ピーンと思いついたから、真潮に言ってみたの」
「なんだそりゃ」

訳がわからん。

「で、アンタの答えを言ってみそ」

「ん。私の答えはね『あかちゃんがお母さんのお腹の中にいる時の
音に似ているから』なんだ」

あかちゃん？

「へえ、でもさ。なんか、いいね、その答え」

「でしょ？」

「でも、なんで『あかちゃん』？」

「ああ。うん。実はさ、私の彼。産婦人科のお医者さんで」

「はあ？」

「で、なんか。まあ、ね。私も色いろと詳しくなつたと言つか」
「へえ」

今度のお相手は医者かよ。

「玉の輿じゃん」

「ん。でも、そんなんじゃないよ」

？ 凧子の今の表情は少しヘンだった。
悲しそうな。

でもまさか。なんで悲しそうな顔するんだ？

「あのさ、私、前から真潮に聞きたかつただけどさ」
いつになく真面目な凧子の声だった。

「真潮は、この町から出ようと思った事はないの？」

それは、俺にとつては思いがけない質問だった。

「考えた事、ないな。この町好きだしさ。就職だつて、ここから通
える私立の学校をわざわざ探した訳だしね」

ふーん、と凧子がつぶやく。

「真潮のお姉ちゃんたちはさ。みんな遠くに行ったよね」

そうだ。旦那の仕事の関係で、一人は海外に、一人は東京に。
みんなバラバラの場所で暮している。

「でも真潮だつて、いつかはケツコンする訳でしょ？」

「まあ、そうだけど」

「そうしたら、引越すことになるでしょ？」

「まあ、そうなつてもさ。ここの地元で適当に家を探して暮らすさ」

「へえ」

「だから、俺のオクサンには、もれなく『海』が付いてくるという
訳さ」

ぷぷぷ、と笑う凧子の声が波音に混じる。

「なに、それえ」

「いいだろ」

「ぜーんぜん。第一、その言い方って、まるでこの海が真潮のものといたじゃないの。ヘンくさーい！」
「ちえ」

「もしかして真潮って、いつもそうやって女の子口説いているわけ？」

「あつ。ばれたか」

「バレバレよあ」

凧子は嬉しそうにケタケタと笑う。

俺も、そんな凧子の笑についていつられて、声だけで笑ってみた。

でも、心臓は。ジリリと焼け焦げる様に痛かった。

「もれなく『海』付きかあ」

凧子がつぶやく。

「じゃあ、お見合いの彼女もさ、海が好きな人だといいね」

ひゅつと息が止まりそうになった。

うちの母親と凧子の母親の情報速度は、光通信も真つ青だ。

「真潮ってさ、お見合いするんでしょ？」

「ああ。わからん」

なんでこんな会話を、せにやなんのかいな。

全く、男として問題外の立場にあることを思い知らされてしまう。

「真潮も結婚かあ」

「だから、そうと決まった訳では」

「なんか、真潮が結婚なんてさ。実家が無くなっちゃう様な気分よ」

「なんだ、そりゃ」

「ん。だつてさ、なんか真潮がいないとさ」

「あ？」

「実家に帰ったって気がしないじゃない」

俺は、アンタの兄ちゃんかいな。

「じゃ、俺はアンタが実家に帰ったって実感できるようにずっと家に張り付いていると？」

「そうそう」

「なんじゃい、それは」

「いいでしょ」

「よかねえよっ！」

「だめか」

「一体、人をなんだと」

「だから、真潮のお姉さんたちがさ」

「は？」

「って、またうちの姉たちの話かいな。」

「ううん。あつ、つまりね。私はずっと真潮が羨ましかったの」
「なぬ？」

「ほら、真潮の家ってなんかいつも賑やかでさ」

「あれは、『うるさい』って言うんです」

「ん。まあ、実際に住んでいる人はそうなのかなあ。でもね、真潮のこと、ずるいつて思ってた、ずっと。私もキョウダイ沢山欲しかった」

「あんな、姉でよけりゃ、ドーゾあげます」

「またまた、もう。ふざけないで聞いて。でね、私は真潮の家が羨ましくて自分でも早く家族を沢山作りたいと思ったの」

「へえ」

「真潮だつてそうでしょ？子どもが沢山いる、そんな家庭がいいでしょ？」

子ども？ 考えたことなかったけど。 まあ、そうなのか？
そうなのかもしれないなあ。

「ああ、そうかもね」

「ねっ。そういうモノよ」

そんなモンですかねえ。

「真潮なら作れるわよ、賑やかなカゾクを」

「そうか？ まあ、なるようになるというか。しかしさ。そんなこと考えて結婚するなんてさ、風子も変わっているねえ」

「へへっ。まあ、それで一回失敗したけどね」

「まあ。そうだねえ」

「でさ、お姉さんが次々とお嫁に行った時だけどお」

「ああ」

「凄く寂しかった。なんか、真潮の家がシーンとしちゃって」

「……」

「でもね、その時に。たまにんだけどね。真潮の声が聞こえたり、真潮が出掛ける音が聞こえたりして。凄くほっとしたんだ。なんか、『ああよかった』って」

「ふーん」

「私の結婚が上手くいかなくて、帰ってきた時もそうだった。真潮がいたから。なんか、『ああ、帰ってきたんだ』ってほっとしたし」

「『し』？」

「うん。嬉しかった」

「へえ」

意外な風子の言葉だった。

「まあ、さっ。あと一年くらいは俺も結婚しないだろうから。二度目もダメになりそうになったら、一年以内に戻ってきなさい」

「もう。やな事いうわね」

「親切心と呼んでくれよ」

「それもそっか」

風子がクスクスと笑い出す。でも、その笑いは直ぐに止まってしまった。

「どうした？」

心配になってつついっつい訊ねてしまう。

「私ね、真潮。今度はうんと遠くに行く事になるかもしれない」

離婚するまで風子は、ここから自転車で二十分もかからない町に

住んでいた。

「彼の仕事場が変わるらしくて。で、そこはね、海の見えない町なんだって」

「へえ」

凧子が結婚する事はもう当然知っているとこののに、面と向ってこんな言葉を聞くと、情けないけど動揺してしまう俺がいた。

早く俺から離れて欲しい、どこか遠く 視界の範囲外に行って欲しいと思っているのに、心のどこかに相反する気持があり、それが拭い去れないのも事実だ。

二つの気持がグルグルと、終わりが無いかのように回っている。

「海が見えないって事は、潮の香りも、波の音もしないって事かな」

凧子が俺に、確認するかのよう聞いてくる。

「まあ、恐らくね」

恐らく？ 嘘だよ。 きっと波の音は、聞こえない。

「だよねえ」

そうだよ。

「じゃあ、今度こそサヨナラってワケだ。『海』とも」

俺もわざと明るく振舞いながら、酷くうすっぺら声を出した。

「そっか。サヨナラか。海とも」

凧子は、自分の髪をひよいと耳にかけた。

そして、今度は自分に向って確認するかのよう、小さな声でつぶやいた。

「サヨナラ、なんだね」

そうだよ、サヨナラなんだよ。 海とも。

そして、 俺とも。

天気予報によると、来週の初めには、ここいらも梅雨入りするらしい。

晴れた海が見られるのも、今日明日の土日が最後かもしれない。ガサガサと、母親が食堂の机の上で宅急便の包みを開けている。父親は、小学校時代のクラス会の幹事会とやらで朝早くから出かけていた。

「あらら」

包みを開けながら母親が声をあげる。

その箱には、母親あての雑貨の他にもう一つ別の袋があった。

「なに、それ」

俺は、少し遅めの朝食を食べる為に珈琲をカップに注いでいるところだった。

「美波からの宅急便なんだけど」

そう言いながら二番目の姉の美波からの荷物に同封されている封筒をバラリと開けた。

「これ、凧子ちゃんに渡してくれて」

凧子？

「なんでも、結婚式で使うサムシングがどうのって」

ああ、四つのサムシングか。

あいつ、あの事は冗談じゃなかったんだな。

「真潮、これを凧子ちゃんに渡してきて」

「ええ？」

「ご飯食べてからでいいから」

「ああ。まあ、解ったよ」

食卓の上にはトーストとベーコンとグリーンサラダが載っていた。

横目で、その荷物を見ながら、俺は熱い珈琲を一口飲んだ。

びゅんびゅんと、海沿いに続く道を自転車で走る。

空は高く、雲ひとつない晴天だった。

海も穏やかで、吸い込まれそうに遠くまで遠くまで続いていた。

夏の海が好きだと多くの人は言うだろうけど、梅雨に入る少し手前のどこの季節にも属さないかのような海が、俺には一番綺麗に見えた。

『凧子は、海に行くって言って出かけたんだけど』

母親に頼まれて行った凧子の家で、おばさんがそう教えてくれた。

まあ、出直してもいいんだけど。

今日は、せつかくのいい天気な訳で、自転車で海まで飛ばすのも悪くない気がした。

だから、姉からの荷物を紙袋に入れたままで、そのまま海へと向った。

姉からの預かり物は、『白い靴』と『レースの手袋』らしい。

どっちが『オールド』で、どっちが『ボロウド』か。

そんな事を考えながら、好きな女の花嫁道具を運んでいた。しばらくごくぐと、はるか先に日傘を差して座る女が見えた。

凧子だった。

凧子は、道路から海へと降りていく階段の一番上にノースリーブのチェックのワンピースを着て、座っていた。

日傘の色はあろうことが、真黒だった。葬式みたいだった。

近づく俺に気がついたのか、傘を持ちながら手を大きく振ってくる。

「なにしてんだよ」

声が届きそうな距離になり、凧子に声を掛ける。

「日光浴よ」

凧子が笑う。

「真黒な日傘さしてかよ」
俺も言い返す。

「だって、日焼けしたら困るもん」
言ってることが矛盾してるって。

まあ、黒は紫外線をブロックしやすい色らしいけどさ。
でも、やはりぎよつとする。『黒の日傘』は。

凧子の側まで来た俺は、道路脇に自転車を止めて凧子の後ろに立った。

凧子は、アイスを食べていた。

「アンタ。いい身分だな」

棒の付いたチョコアイスだった。

「いい身分でしょ」

ニカッと笑った凧子の唇がチョコ色に染まっているのが見えた。
紙袋を持って、凧子の隣に腰掛けた。

「海、綺麗だね」

凧子が言う。

「ああ」

俺も答える。

「私、一年の中で一番この時期の海が好きかなあ」

「へえ」

へえ、なんて愛想のない返事で誤魔化す。

そっか。凧子も、俺と同じような事を思っていたんだな、と思った。

「はいよ」

ポンと、凧子と俺の間に紙袋を置いた。

「プレゼント？」

「誰が、誰にじゃ」

「えへへ」

凧子の日傘を持ってやった。

凧子はアイスを口にくわえながら、がさごそと袋の中をいじりだ

す。

そして一番上に載った、姉からの手紙を読み出した。
相変わらずアイスは口の中に入ったままだ。

「たれるよ」

んんん、と言いながら、凧子は手紙を紙袋に戻し、アイスを手
に持ち食べ始めた。

「美波ちゃんにお礼を言わなきゃ」

細く小さくなったチヨコのアイスが、ぱくりと凧子の口に入った。

左手には、茶の色を残したままのアイスの棒だけが残った。

綺麗に塗られたマニキュアの指と、チープな感じのアイスの棒が、
妙な違和感を醸し出していた。

口をもごもごさせながら凧子が話す。

「あとは、ブルーだわ」

「ブル？」

「そうそう。サムシングニューのドレスとブーケでしょ、オールド
の靴と、ボロウドの手袋と。だから、あとはブルー」

なるほど。その『ブルー』ね。

「あのだ、質問していい」

「どーぞ」

「同じ美波姉から借りたもので、オールドとボロ に分けるのって、
反則じゃないの？」

凧子がぶつとした顔になる。

「いいんです。気持の問題だから」

偉そうな顔して凧子が話す。気持の問題、ね。
そんなもんか。

「ブルー。どうしよう」

「青いパンツでも履きゃあいいじゃん」

「青パンかぁ」

「略すな」

「でも、いい考えかも」

「冗談だろ？」

「冗談に決まってるじゃない」

ケタケタと笑う凧子のでかい口には、やっぱりチョコがついていた。

「チョコ」

「えっ？」

「チョコが」

「ああ、アイス食べたかった？ 真潮も」

誰が、食いたいつて？

凧子は左手のアイスの棒を見ている。

「もう、残ってないしねえ」

だからアイスを食いたい訳じゃねえっ。

ガサシユツという紙袋のつぶれる音がした。

あっ？ と思うと、俺の直ぐ前に凧子の大きな二重の目が見えた。

その目には、俺が映っていて。

次の瞬間、唇に冷たい感触がした。

自分の頬に、凧子の髪が触るのがわかった。

俺は、黒い日傘を差したままだった。

何が、何だかわからなかった。

「今の」

自分でも、情けないくらいの間抜けな声だった。

凧子は、特に変わった風でもない顔をしている。

「お味見、チョコアイスの」

平然とした声で凧子が答える。

うるたえているのは、俺のほうだ。

「あっ、ああ。味見ね」

ここで動揺しては、かつこ悪い気がして俺もそう答えた。

凧子は黙って海を見ている。

俺は急に居心地が悪くなってきた。

と、いうよりも。一刻も早くここから逃出したかった。

「み、美波姉からの荷物は、渡したからな。あと、これっ」

そう言っただけで、日傘を凧子に差し出す。

凧子は驚いたような顔をして、俺を見た。

「日光浴だけど、日焼けは困るんだろ」

そう言いながら俺は、ひょいと立ち上がった。

「俺、帰るから。アンタも、気をつけて帰れよな」

まともに凧子の顔が見れないくらい、心臓がバクバクしていた。

こんな姿を生徒に見たれたら、絶対にバカにされてしまうだろう、
という程の狼狽ぶりだった。

俺は急いで自転車を方向転換させると、それにまたがり、こぎだした。

視界から凧子は消えたけど、背中ではおもいつき凧子のことを見ている自分がいた。

そんな俺の背中に向けて、凧子が何かを言ってきた。

バカ マシオ

凧子は、確かにそう言った。

後編

「田中先生、国語辞典の納品の確認をお願いします」

「あつ。はい。ありがとうございます」

学校事務の杉崎さんに声を掛けられて、席を立つ。

ヒタヒタと冷たい廊下を歩きながら、窓の向こうに見える海を見た。

梅雨の海は、どんよりとしていた。

予報通り、『きつぱりと、梅雨が来た』と思った。

あれから何日か過ぎたけれど、凧子とは顔をあわせていなかった。

学校の玄関ホールに、幾つかの段ボール箱が積まれていた。
毎年のこの時期には、新入生向けの辞書の共同購入をしていたのだ。

ふと、ダンボールの隣に立つ男性に目がいった。

去年までの担当さんとは、背格好が違うように見えた。

以前の人より一回りは背が高いその人が、俺の足音に気がついたのか、ぱつとこちらを振り向いた。

「えっ」

思わず声が出てしまった。

あちらさんも、俺の顔を見て言葉を失っていた。

「あつ。こちらの会社で働かれましたっけ」

俺からの言葉に、相手は苦笑いをした。

「担当替えがあつてね。まあ、君が学校の先生だって事は、凧子から聞いてはいたけど。よりによって、ここの中学だったとはね」

そう言いながらダンボールの隣に立つ男性は、凧子の別れたダンナだった。

納品の数を確認したあと、段ボール箱を台車に載せて、一階の空き教室へと運んだ。

明日から、ここで辞書の引き渡しを行なうところになるのだ。

空き時間だった俺は、なんとなく凧子の元ダンナをお茶に誘った。

といっても、紙コップ式の自販の珈琲なんだけれど。

元ダンナは確か、俺たちよりも二つか三つ上だった。

ということは、もう三十は過ぎているのだろう。

自販の側に置かれた、細長いプラスチック製のベンチに二人離れて座った。

「凧子は」

「えっ？」

元ダンナが、とつとつと話し出す。

「彼女は、元気なんだろうか」

「……元気ですよ」

凧子とは、一切連絡をとっていないということだろうか？

「ああ、そうか」

それきり、また元ダンナは、ふつりと黙ってしまった。

元ダンナの左手が目に入る。銀色の細い指輪が光っていた。

「再婚、されたんですか？」

非難を帯びた声で聞いてしまう。

「ああ。子どもの為だね」

子ども？

「えっ？ 子ども？」

驚く俺の反応を楽しむ様な表情をして、元ダンナが口を開く。

「凧子から聞いてない？ できたんだよ、子どもが。で、凧子は家を出たってわけさ」

最低なヤツ。

「ヘンなもんだよな。あんなに子どもが欲しくないって言ったアイツに子どもが出来て、子どもが欲しくてしょうがない風子は産めないなんて」

「『産めない』?」

「ああ、いくらお隣さんでもそこまでは話さないよな。風子、子どもが出来にくい体質らしんだ。結婚してから解った事なんだけどね」

目の前が真っ暗になる。 そんな話は、聞いてない。

「まあ、勿論。離婚の原因は、それだけじゃないけどね」

この人の、風子の全てを過去として話す姿を不思議な気持ちで見ていた。

風子は生きているし、風子の体質の事だって今まだ続いている現実の事だろうに。

ふと、風子と交わしたコンビ二帰りでの会話が頭に浮かんだ。

『実はさ、私の彼。産婦人科のお医者さんで』

そうだ。絶対にそうだ。

紙コップの珈琲を飲みながらこの人は明日のお天気を気にするみたいに風子の体の事を話すけれど、風子の中では今でも向き合っているリアルな問題に違いないだろうって思えた。

腹立たしい。

この人に。

そして、そのことを風子の口から直接聞く事ができない、自分の立場に。

ふつーと、元ダンナは熱そうに紙コップに口をつけた。

俺は、そんな彼の仕草を、ただただじっと見つめていた。

遅くなつた帰り道、暗い雨の中を家に向い急いで歩いていった。

サ　という霧状の雨は、顔や体にじわじわとその水分を撒き散らしながら降り続けている。

ジジジと、街灯が嫌な音をたてて点滅していた。

傘なんか差しても、ほんの気休めにしかなかった。

家の近くまで帰りついたとき、大きな声と共にお隣さんの玄関からぱつと飛び出す人の姿が見えた。

凧子だった。

花柄の傘をバツと広げて歩き出す凧子と、直ぐに視線があつた。

「オカエリ」

凧子から、声を掛けてくれた。

「あ。ああ」

昼間の事を思い出すと、俺はうまく挨拶が出来なかった。

「あーっと。ブルー！」

へっ？　という顔で凧子が見る。俺だって自分で言った「ブルー」の言葉に、へっ？　と思つた。

「ああ、つまり。ブルーは？　サムシングの。見つかったかなあつて」

恐ろしいくらいメチャクチャな文法だった。

しかも、唐突な話題提供。

「ああ。ブルーね」

俺の横を通り過ぎようとしていた凧子は、雨の中そのままの場所で立ち止まつた。

凧子の髪にも、パツと小さな水滴がついていくのが見えた。

「ブーケのね、その中に見えないように青い花を入れるのが普通なんだって」

ブーケかあ。

「へえ。青い花をね。いいね、それ。じゃ、一件落着か」

「まあね。でも。違ふのよね」

「何が？」

ブーケに青い花を入れるのは、青いパンツを履くよりもいい考え
だと思ったが。

「私が本当に欲しいブル は、それじゃないのよ」

「本当に欲しいブルー？」

「うん。本当に欲しいブル」

ブルーねえ。

「昔テレビで、あったよな。ブルーとか、レッドとか、イエローと
か」

「最近ブラックもあるらしいよ」

ぶ、ブラック？

「へえ。今度ちびに聞いてみよう」

なんて、言いながらヤバイと思った。

『ちび』なんて子ども連想させる言葉を、 凧子の前で出す自分の
無神経さに冷汗がでる。

「ああ、美波さんとこの？」

凧子もご丁寧に話しにのってきやがる。ますます、冷汗だ。

「あつ。ああ。つ、つまりだなっ！」

「な、なに？ 突然大きな声出さないでよ。びっくりするでしょ」

「あつ。ごめん、つまり俺が言いたいのは」

「なによっ？」

「だ、だから。その。サムシングもいいけど、幸せになって欲しい
とアンタに」

「……」

「メチャクチャ幸せに」

くると傘を回しながら凧子が笑う。

「メチャクチャって、あんまりいい響きじゃないけどねっ」

「えっ？ そうか？」

国語2の凧子に言われてしまった。

「でも、そうね。うん。がんばる」

そう言って口角を上げただけの微笑を、凧子は俺に向けてくる。

心配になる。

「だ、だから。少しくらい気に入らないブルーでも大丈夫だって」
自分の発言ながら、意味不明だった。

「そっか。そうね」

そんな励ましにも、凧子は相槌をうつてくる。

こういうところ、本当に凧子は優しい。

「でもね」

再び凧子が傘をくるんと回す。

「気が付かなかったけど、私はそのブルーがずっと欲しかったの。
その事に私ってば、今ごろようやく気が付いちゃって」

そんなに悲しい顔をして、凧子は一体どんなブルーを諦めたとい
うのだろう。

「凧子」

「でも、いいの。気が付くのが遅かったの。欲しいものが手に入ら
なくてだだをこねるなんて、子どものすることだものね」

そう言つと、ひらひらと手を振って凧子は雨の道を歩き出した。

霧雨の中、まるでどこかに消えてしまいそうになるくらい、凧子
は独りだった。

なんだ。

なんだ。

なんなんだ？

そんな凧子の姿に、胸がざわついてしまう。

その晩、夢をみた。

眩しい光を感じながらそっと目を開けると、そこは砂浜だった。
大昔の頃の夢だ。

みんな小学生の姿だった。

これは全くの作り物の夢って訳でもなく、どちらかというと回想する様な夢だった。

姉さんや凧子のワンピースには見覚えがあった。

真波姉は、ひまわりのワンピース。

美波姉は、さくらんぼのワンピース。

その隣には、麦藁帽子をすっかり被った凧子が紫陽花のワンピースを着てニコニコしながら立っていた。

俺は、半ズボンなんか穿いていて裸足で砂浜を走りまわっていた。

ギュギュとしなる砂の感触を足の裏にくすぐったく感じながら走っていた。

そんな俺を他所に、姉たちと凧子が砂で城を作り出し始めた。

砂浜の上には、赤や黄色のカラフルなバケツやシャベルがあってみんなそれぞれの道具を使って城を作っていた。

姉たちから俺に、バケツに海水を入れて運べとの命令が下った。

触らぬ神になんとやらで、俺は大人しく海水を運び始めた。

最初こそ、少なめに海水を入れて運んでいた俺だけど、段々と面倒になって（なんで俺がやるんかいな！と）バケツに出来るだけ一杯一杯に海水を汲むようになっていった。

ぐいぐいと、満水状態のバケツを、うんしょうんしょと運んだ。

プラスチックの柄の部分で、ういんとしなるのが分かる。

やばいかなあ、と思った。

俺の視界には、ワンピースを砂まみれにしながら城を夢中で作る凧子が見えた。

姉達はさすがに年上なだけあって、ワンピースの裾が砂に付かないように注意しながら遊んでいた。

ぱっと凧子と目が合った。

すると、凧子は砂まみれのままで僕の方に走ってきた。

凧子が走るたびに、腕から、膝小僧から、ワンピースから、砂が飛び散った。

「真潮！」

凧子が、俺の名を呼ぶ。

「見てっ！」

そう言う凧子は、俺の後ろを指差した。

俺は重いバケツを砂浜に置くと、凧子に言われるがままに後ろを向いた。

ザザザザザという音とともに、サ　　と押しよせる波が足元を濡らした。

日差しは眩しくなってきたのに、海水はまだ冷たかった。

夏でもない、冬でもない。

名前のない季節の海が、目の中に入りきらないくらい広がっていた。

「キレイ」

引き潮に凧子の声が吸い込まれていく。

波は凧子のつぶやきを、海の底まで運んでいくように見えた。

海は、本当に綺麗だった。

海水を汲むことばかり考えて、ろくろく俺は海を見ていなかった。俺に凧子が教えてくれた。

「とってもキレイな青だね」

凧子が嬉しそうに言う。

青。青といえば。

「『ブルー』だっ！」

夢中になって見ているテレビの特撮ヒーローの『色』を思いだした。

『青』は『ブルー』だと。

「ほんと、『ブルー』だ」

二人して、げらげらと笑った。

凧子も俺の影響で、その番組が大好きだった。

そして、二人してナンバー1でないナンバー2の『ブルー』のファンだった。

ブルー。

海。

ブルー。

海。

ブルー？

海？

『真潮だつてそうでしょ？ 子どもが沢山いる、そんな家庭がい
いでしょ？』

『本当に欲しいブル はそれじゃないの』

『真潮なら作れるわよ、賑やかなカゾクを』

幼い凧子が笑う顔と、今の凧子の悲しい顔がダブリ。

そしてその笑顔は、泡の様に消えていった。

次の日、家に帰る途中に寄った本屋では、レジの側に置かれたラジオから週末の天気予報が流れていた。

『……地方の週末のお天気は晴れ。久しぶりの青空が広がる事でしょう』

「あつ。真潮。お帰り」

俺は傘を畳みながら、その声のする隣の家の二階を見上げた。

「この間、美波ちゃんに電話をかけて、お礼を言っただ」

凧子は、雨だというのに窓から首を出して、俺のいる下を見下ろしていた。

「凧子」

俺の言葉に凧子がビクンとした。

「今度の土曜、空けといて」

有無を言わせぬ、俺の声の掛け方だった。

凧子は驚いた顔をしながら、俺のことをじっと見つめていた。

そしてその凧子の長い髪は、まるで雨の糸の様に、俺に向かって真っ直ぐに垂れていた。

天気予報は、驚くほど当たった。

どこまでも突き抜けるような青空が、俺らの頭上に広がっていた。

そんな中、凧子は仏頂面だった。

凧子は、自転車と俺を交互に見て心配そうな顔になっていた。

「どこに行くの？」

当然の質問を俺に向けてくる。

「俺が、凧子が欲しい『ブルー』をあげられるところ」
ギクリとしたあと凧子の表情が揺れる。

「真潮。なに、いい加減な事を言っているの？」

凧子が俺を射抜くような瞳で見つめてきた。

「いい加減な事かどうか、凧子が確かめればいいだろ」

「……」

「凧子」

「乗るわよ」

自転車は凧子を乗せて走り出した。

「見かけによらずアンタ、重いねえ」

自転車を漕ぎながら凧子に声を掛ける。

「バカ」

凧子の声が柔らかく俺の背中に響く。

「嘘だよ。悲しくなるくらい軽んだけどさ。食ってる?」

「……バカね」

本当にさ。

凧子のあまりの軽さに、俺は不安になっちゃっよ。

自転車はあつという間に海岸通りに出てきた。

「アンタの欲しいブルーって、海だろ」

俺の背中を掴む凧子の手の力が、一瞬抜けるのを感じた。

「おい。凧子さん。後ろに乗ってるかい?」

「の、乗ってるでしょ」

「返事は」

「なんのよ」

「だから、アンタのブルーのだよ」

「ああ、どうかな。忘れた」

凧子の声が上がっている。

「物忘れババア」

「バ、ババアですってえ! ああ、そうね。うん、そうかもそうかも。真潮の言う通りかも、これで満足?」

「満足だよ」

「そつ。それはよかった。じゃ、家に帰りましょ」

俺の背中の中のシャツを凧子がぎゅいと引っ張る。

「凧子の国語力に問題あり」

「な、なにがよ」

「凧子はさ、『俺が海をあげる』ってどういう意味だと思っているの？」

波音が、BGMのように海岸沿いを走る俺たちの耳に響いてくる。

「知らないわよ」

嘘つきな凧子の声が波音にのまれる。

「泣くかな、母親」

「えっ？」

「泣くかもな、凧子の母さんも」

「……真潮」

自転車を停めて、凧子へと振向く。

「攫っていいんだよね？」

「真潮」

「攫うから、ダメでも」

そう言って俺は再び自転車を漕ぎ出す。

背中の凧子は何も言わない。

言わないのをいい事に、俺はどんどん走り続ける。

走りながら、やっぱり不安になる。

「どこに行くの？」

ようやくしたの凧子の声だった。

「役所だよ」

「えっ？」

「美波姉のお古の届があったからさ、婚姻届」

「真潮」

「これぞまさに『サムシング オールド』ってヤツだろ？」

わざとおどけた口調でそそくさと話してしまう。

凧子の反応が気になる。

「ばかっ」

凧子の細い腕が、俺の腰にぎゅっと回された。

これは……YESだっ！

体中の細胞がワツと沸騰した感じがした。

シャツ越しに、凧子の体温を感じた。

その温もりは、俺がずっと欲しかったものだった。

正直、これから面倒くさい事がごまんと待っているだろう。それこそ『勘当モノ』のお怒りを受ける可能性もあるんだ。でも。

それでも。

梅雨に晴れ間の、こんな天気があるように、

大丈夫、どうにかなるさ。

潮風が優しく吹いてくる。

大きな犬と散歩をする人と通り過ぎる。

空もブルー

海もブルー。

凧子の体温を背中に感じながら。

役所までは、あと少し。

チヨコ ホリック 1 (前書き)

「サムシングブルー」の二人の高校編です。
悲恋要素を含む展開です。

チョコ ホリック 1

「真潮^{ましお}、チョコ買^なってきて」

お隣りの風子^{なぎし}さんは、そんな台詞を俺に言ってきた。

「二月のこの時期に、なにが悲しくて男がチョコ売り場に行かないといけないんだよ」

教室の廊下側の窓から顔を出して話し掛けてきた隣りのクラスの風子にそう答える。

暖房は効いているけど、廊下は寒い。

風子が開けた窓からも、ひんやりとした空気が流れ、俺の顔に当たってくる。

「もう。真潮^{ましお}ったら。この時期だからチョコは必要なんですよ！」
小さな声で風子は早口にしゃべった。

「私だつて自分で行きたいわよ。でもさ、さっきの体育の時間に、足を捻^{ひね}っちゃったから」

そう言つて風子が指で下を指すもんだから、俺も廊下の方に顔を出して風子の足を見た。

確かに風子の右足には、しっかりとサポーターがしてあった。

「体育の授業、なんだつたんだ？」

「サッカー」

「女子が？」

「うん」

女子高生がサッカーね。

まあ、それはいいとして。

チョコかあ。

「どこに買いに行くんだ？」

溜息をつきながら聞く。

「えっ？ 行ってくれるの？」

凧子の顔がぱつと輝く。

「駅前のビルの一階の特設会場。今ね、バレンタインシーズンだから、私がお目当ての東京の有名なお菓子屋さんのチョコも入っているのよ」

凧子はチョコ好き女だった。

市販のチョコも、限定品が出るといっては、しこたまそれを買って食っていた。

「なに？ 自分の為に買うとか？」

チョコ好き女なら、ありうるかもしれない。

凧子は自称『チョコ ホリック』だし。

一日一チョコとか言っている。

ところが、そんな俺のそんな台詞に凧子のヤツは目を真ん丸くした。

「真潮って、凄い事考えるのね。バレンタインに自分にチョコを買う人っていないでしょ」

凧子が呆れたような声を出して言った。

ハイハイハイハイ、俺が考えなしでございましたよ。

それじゃあ、なんですかね。

男の俺に、自分が好きな男のチョコを買わすのは、『凄い考え』

とは言いませんか？

「俺一人じゃ行かないからな」

そう凧子に言う。

「自転車の後に乗せてやるから、アンタも来なさい」

そう言った俺の顔を見て、凧子は嬉しそうに笑った。

制服のままで二人して、自転車に跨る。

一応、風子の好きな男が学校のヤツって可能性もあるわけだから、学校から少し離れたところから乗せようか？ と聞いたら、

「大丈夫。今は職員会議中だから」なんて言って風子が舌を出した。

「嘘。相手って、センセイ？」

風子はYESの代わりに、恥ずかしそうに笑った。

駅までの道を、自転車で走る。

「さっきの話だけどさ。先生って誰先生？」

冷たい風と、異様に大きく聞える自分の心臓音とで、俺の耳はちぎれそうだった。

「ああ、江崎先生よ。ほら、体育の山田先生の産休で来ている」

ああ、そういえばそんな先生が来たって聞いたなあ。

その先生のこととて、うちのクラス委員の椿谷がなんか言ってたよな。

「聞いてよ、田中。山田先生の代わりに来た江崎って。あいつ、絶対に女子生徒に手を出す気にいると思うのよね」

委員会に行く途中の廊下で、そう言いながら椿谷がプンプンと怒っていた。（実は、俺もクラス委員）

「聞いてよ、真潮。江崎先生って、とってもいい先生よ」
はあ。

いたよ、ココに。

江崎先生に、手を出されそうな女が。

「風子は、江崎先生にチョコをあげるんだね？」

誰の為の確認だよって思いながら、文章にしてそのことを聞いた。

「うん。そうよ。でもライバル多いからなあ」

うーん、困るのよね。なんて言って風子は唸っている。

「あのさ、風子さん。アンタのその言い方だと、まるで江崎先生とどうにかなりたいていう風にボクには聞えますがね？」

おいおいおい、風子。冗談じゃないよ。

いくらなんでも『先生』は、まずいだろつよ。

「バカね、真潮って」

風子が俺の背中にぴたつと体をつけてきた。

風子の口が、俺の耳の側に来るのがわかる。

「好きな相手と『どうにかなりたい』って思うのが恋でしょ？」

熱に浮かされたような言葉を、風子はさらりと言つてのけた。

じゃあ、それが恋だつて言つのなら。

俺の風子に対する気持は、もう終わっているってヤツだろうか？

「骨川筋子」

背中の中風子に言う。

「先生を本気で落としたいなら、もう少し肉がついていたほうがいいんじゃないの？」

ん。そうなのかなあ？ と風子が言う。

「特に胸のね」

そう言った俺の背中に、風子がゴンと頭突きをしてきた。

「すげ〜」

風子ご指名のチヨコ屋の前には、凄い数の女の子が集まっていた。

「行ってくるわ、真潮」

風子が足を引きずりながら、そのブースへと向いだした。

「っ、おいっ！ ついていつてやるよ」

風子の体を守るように、がっしりと抱えた。

「ありがとう」

その一言で。

風子の笑った顔で、なんでもしてやつちゃう俺は。

終わっているいいないはともかく、かなりの重症なんだろうと思う。

人ごみを掻き分けて、ショーケースの前に辿りつく。

すると、凧子がいきなり注文をしだした。

「おいおい、ちゃんと商品を見たのかよ」

売り場のオネエサンにお金を渡す凧子に言う。

「うふふ。事前に完璧リサーチ済みよ」

凧子は、得意げな微笑を俺に向けてきた。

ショーケースの向こうから、紙袋に入ったチョコが凧子に渡された。

「ほれほれ、凧子。それは俺が、持つからさ」

そしてまた人ごみの中を、江崎へのチョコが入った紙袋を持ち上げながら、俺は凧子を抱えて歩きだした。

「なんか凄い体験だったなあ」

時間にしたら僅か十分かそこいらのことだと思うのに、体中からエネルギーを吸い取られた気がする。

「凄いでしょ。女の子は、大変なんだからね。だからあ」

そう言っただけで凧子を見た。

「真潮もね、そこんとこちゃんと分かって行動してね」

凧子がにやりと笑う。

「なんだ、そりゃ」

「私聞かれたんだ。真潮のクラスの椿谷さんに。『田中君と付き合っているの?』って」

「はあ?」

「このこの。真潮もやるな。椿谷さんって美人だもんね。ってことは、真潮もついに彼女もちか」

凧子が、ふっ、やれやれ、なんて言っている。

「勝手に、言っただけいいさ」

ほら、行くぞと凧子に言い、俺は自転車に跨った。

駅前の賑やかな街並みから、段々と住宅街へと景色は変わる。
冬の海が、暮れる空色を映し、オレンジ色に輝いている。

風は、冷たい。

流石の凧子も寒くなったようで、やけにぎゅっと俺の体に手を回してきている。

「ねえ、真潮」

「ん？」

緩やかなカーブを右へと曲がる。

自転車を漕ぐ足を休める。

漕がなくても、進んでくれるのだ。

「真潮って、椿谷さんと付き合ったら、やっぱりこうやって自転車の後に乗せたりするの？」

ようやく聞き取れるくらいの小さな声で凧子が言う。

「いや。乗せないよ」

俺も答える。

「ふーん。そう」

それきり凧子は話さなくなった。

俺も、そのまま口をつぐんだ。

この話は、お互い深入りしちゃいけない。

突き詰めてしまうと、お互い今いる場所に戻れなくなってしまっ
たろう。

俺の望みはそんなことではない。

自分の気持を伝える事じゃない。

ただ、凧子の中で俺を何かに利用するのでもいいから、存在価値
があってくれば、それよかった。

でも、ずっとそんな気持で、俺はいられるのだろうか？

あるかないか分からないくらいの、緩い坂道。

ペダルを漕がなくても、自転車に跨る俺たちを坂の下まで運んでしまう、そんな坂道。

それは、歩いていると気が付かないくらいの、穏やかな角度なんだけど。

「気が付いた時は、手遅れってことだな」
ぼそつと言った俺の言葉は、凧子には聞えない。

もう中毒なのかもしれない。
日々、凧子への気持が加速していく。
それはもう、やばいくらいまでに。

ナギコ ホリック

凧子なしではいられない俺が、遙か未来の坂の下で。
惨めに一人転がっていた。

チヨコ ホリック 2 (前書き)

「サムシング ブルー」の二人の高校編です。
悲恋を含む展開です。

チョコ ホリック 2

「真潮^{ましお}、チョコ食べたいよね」

「はあ？」

「うん、そうだよ。そうか、そうか。じゃあ、行こう」

隣りの家に生息している幼馴染兼同級生の^{なまこ}尻子は、日曜の朝から人んちに来たかと思ったら、コートも着ていない俺の腕をぐいぐいと引っ張り出した。

「な、な、なんなんだよ、一体」

尻子の手首を掴む。

尻子の視線が宙を彷徨う。

「だから、真潮がチョコを食べたいだろうって思って、で、チョコ買うのに連れて行ってあげたら喜ぶかなあって」

「日本語が変だよ、アンタ。俺に、意味が通じるように言ってみな」

じつと尻子を見る。

「ああ、もう。真潮は硬いんだからっ！言えはいいでしょ！」「チョコを買いに行くの付き合って」って！」

ぶーたれて下唇を出しながら尻子が言う。

「分かったよ。で、『今年』は、どこまで買いにいくんだ？」

尻子の瞳がパツと輝く。

「恵比寿！」

「……そりゃ、このヒトは、そんな場所まで、一人で辿り着けないよな。」

俺たちが住む街から恵比寿に行くには、電車で三本乗らないとい

けない。

「なんかね。『バレンタイン チョコフェスティバル』っていうのが開催されて、外国とか国内とかの小さなお店のおいしいチョコが集まるらしいのよ」

電車の中で、隣りに座った凧子が雑誌を広げ出す。

きつと、去年江崎先生の為に駅ビルのチョコ売り場に行った時とは比べ物にならないくらい、会場は混んでいるんだろうなあと思うと寒気がした。

結局、凧子は不幸なんだか好運なんだか知らないけど、江崎先生には相手にもされなかったようで。

また今年は違うヤツにチョコをあげるんだろう。

今度は、誰だろう？

ガタガタと進む電車の中で、ゴソゴソと凧子が鞆の中からポッキを出した。

「真潮、食べる？」

ポッキ は食べかけみたいで、すでに封は開いていた。

「電車の中で、ものは食わねえの」

凧子の持つポッキ の箱ごと、上から押さえて鞆に戻した。

「えゝ。電車の中で食べちゃだめなの？」

「マナー」

「じゃあ、新幹線の中でもお弁当とか売っているのは何でよ」

「乗っている時間が違うだろ？」

「同じよお。だって、遠いもん。東京」

確かにそうだけど。

「じゃあ、一本だけな」

「えゝ。まあ、いいや。一本食べよ」

そう言つて、凧子は鞆からポッキ を一本出して、まさに『ポッキ』食べ出した。

「そうそう、この間私ね、自分でポッキ 作ってたんだ」

「はあ？」

「えへへ。プリッツ買ってね、溶かしたチョコを回りに付けたんだ」

得意げな顔で凧子が言う。

「意外と均等にチョコを付けるのって難しいんだよね」

「へえ」

凧子って、本当に人と少しずれたことをするヤツだよなあ、と感心してしまう。

「美味かった？」

「ん？」

「その手作りポッキ もどき」

「そうねえ」

凧子の大事なポッキ は、もうチョコのない部分しか残っていなかった。

「あれはね、アイデア勝負だから。こっちの方がやっぱり美味しいかも」

そう言って、凧子は残り部分をパクツと口に入れた。

ようやく、といった感じで恵比寿に着いた。

確かに、これなら新幹線で静岡に行った方が時間的に短いのかも
しれない。

「えっと、こっちこっち」

凧子が雑誌を見ながら歩き出す。

「ちよい待ち」

凧子のコートに付いたフードを引っ張る。

「あっちでしょ」

えー？ と言いながら、凧子が雑誌に描かれた地図と、今の場所
を見比べる。

「ほんとだわ。真潮大先生」

凧子を一人で来させないでよかったよ。

恵比寿の街は雑多な感じがする。

街の名前の聞こえよりは、おしゃれな街ではない気がした。
そんな恵比寿の街を凧子と歩く。

つんのめりそうな速い勢いで、凧子が歩くのが可笑しい。

目的地の会場に近づいてきた時、色とりどりの紙袋を持った女の子たちが、俺たちとは反対に駅に向って歩いてくるのが見えた。

腕時計を見ると、もう昼近くになっていた。

「ああ、十時に開場だから、チョコもうないかも」

泣きそうな顔で、凧子が言う。

「あ。まあ、そうしたら、その時だ」

無いもんは無いんだから。

会場は大きなイベントホールで、建物に入るとすごい熱気だった。

入り口で、透明なビニールの袋と会場案内図を買った凧子は、そのまま動けなくなってしまった。

「ほれ。行きたい店あるんだろ？ 行くぞ」

凧子の背中を押す。

「こ、怖い」

「怖い？」

「人が沢山すぎる」

入り口とレジは、会場から数段高いところにあった。

だから、会場の様子がよく見渡せて便利だと思ったけど、日頃見慣れない人の数に凧子はビビってしまったようだ。

会場の端に凧子を連れて行く。

勝手知ったるなんとか、というやつで凧子の鞆からマーカーを出す。

「凧子が買いたいチョコの店を、このマップに印しな。買ってきてやるから」

マーカーのキャップを開けて、凧子に渡す。

風子は、はつとしたような表情になって、そしてメーカーで印をつけ始めた。

その店の数は七店にもなった。

ってことは、七人にあげるってことか？

まあ、それはそれでいいとして。

「で、どんなのを買えばいいんだ？」

風子からチョコを貰うヤツも、まさか野郎がそれを買ったなんて知ったらさぞかし驚くだろうとな、と思う。

「真潮」

風子が呼ぶ。

「なんか、落ち着いてきた。私、自分で行けるわ」

そう言って、マップを持って歩き出そうとする。

「ついて行くよ」

俺も風子の側に並んで歩こうとした。

「大丈夫だよ、一人で」

風子がそう言う。

そして、マップを広げて会場を見下ろしながら

「最初に、ここに行つて、次にここでしょ」

次は、と地図を指でなぞりながら風子は七店へのシュミレーションをした。

「私、行つて来るから。だから、真潮はここで待っててね」

と言つて、風子がコートを脱ぎだした。

細い体が、中から出てきた。

「これ持つてて」

と言つてコートを俺に渡してきた。

「あちこちの隙間をぬって歩くには、この体型つて便利よ」

そう言つてにこりと笑うと、風子はチョコ会場のフロアへと下りて行った。

「ともかく寝る」

家のドアを開けながら、凧子が言った。

「俺も、何もしなかったけど。なんか疲れた」

はいよ、とチヨコの紙袋を凧子に渡しながら言った。

「『人アタリ』だよな」

「かもな」

「もう、二度と行かない。都会へは」

「だな」

全くの地元体質の俺たち二人は、きつと間違っても東京には生活の場を求めないんだろう。

「じゃあな」

凧子が玄関に入るのを見て俺は言った。

「あつ、真潮」

凧子が俺を呼んだ。

凧子は照れくさいような顔して俺を見ている。

「今日は、……ありがとう！」

そう言つと、凧子はボタンと勢い良く玄関の扉を閉めた。

夕飯も済んで、風呂から上がったら凧子から電話が来た。
なんと、今から凧子の家に遊びに来い、だと。

「うっ。チヨコくさい！」

凧子の家は玄関からもう、チヨコの匂いがした。

「いいから、はい、はい。上がって」

凧子が靴を脱いでもない俺の腕をグイグイと引っ張る。

リビングには、チヨコのケーキやらクッキーやら（おまけに、噂の手作りポッキ もどきとやらも）が、そして今日買ったと思われるチヨコから、なにから全て揃っている。

「なに、これ。一体どーいうこと？」

まるでこれは、

「パーティよ。チョコレート パーティ」

だよな。

はいはい座って、なんて言って風子にソファに沈められた。

「あれ？ おじさんたちは？」

いつもは、いるよな。

日曜のこんな時間なら。

「ん。お母さんの調子が悪くてさ。今、おばあちゃんところにいるんだ、お母さん。で、お父さんはそのお見舞いっていうか」

じゃあ、風子は今日は、一人つきりなんだ。

賑やかな自分の家の隣りで、風子は一人で過ごしているのかと思う不思議な気がする。

「そつか。パーティだな。うん、で、何のだっけ？」

「だから『チョコ』のだったば」

もう、真潮はくと言いながら、風子が珈琲をいれ出した。

「これね。ゴディバの珈琲だよ。チョコフレーバー」

風子の言葉とともに、すごい匂いの液体が、目の前のカップに注がれた。

「徹底してますね。風子さん」

溜息をつきながら、苦笑いをした。

「徹底しないとね、真潮さん」

風子は、楽しそうに笑った。

風子が切り分けた、チョコ シフォンケーキを食べる。

風子は、トリフチョコをつまもうとしている。

ん？

「すいませんが、風子さん」

へっ？てな顔で、風子がチョコを持ったまま止まる。

「それって。今日買ったチョコ？」

「えっ？ 何言っているの？ 当たり前じゃない」

そう言つて、風子がチョコをポンと口に入れた。
俺もハムつとケーキを食った。

ん？

「すいませんが、風子さん。じゃあ、今日買ったチョコつてもしかして全部ここに？」

七人のチョコ侍への分は？と思ひながら聞く。

「そうよ。だつて自分で食べるために買いにいったんだもん」

ケロリとした口調で風子が言う。

「あげないの、チョコ？」

「チョコつて、チョコレートを？ 誰に？」

目をくりくりさせながら風子がこつちを見る。

「いやあ。誰にと聞かれても、俺も困るけど」

「じゃあ、今年は誰にもあげないってことか？」

「雑誌でバレンタインのチョコフェスティバルの記事を見つけてさ。」

『ここに行けばいろんな種類のチョコが一気に手に入る』って思つて行つただけだなあ」

「待て」

待て、風子。

「アンタ、去年と言うこと違つている」

「へ？」

「風子は去年『自分の為にバレンタインにチョコを買う人っていない』って言つてたぞ」

「わゝ。去年の私つて、ホントおばかね」

次は何を食べようかなあ、なんて、風子はテーブルの上のチョコをあれこれ見ている。

そんな風子を見ながら。

いつまでも、変らぬ思いに捕われて動けない自分の固さを思った。

今なら。

言ってしまったおうか。

凧子に。

自分の気持を。

「凧……」

「真潮、どう？ そのシフォンケーキ」

「えっ？ 美味しいけど」

「甘くないよね」

「甘くないけど」

「よしっ！」

「はあ？」

「森永先輩って、文化祭の委員でお世話になった人がいてね。その人って、とくっても親切で素敵なんだけど。で、その人が、チョコのあの口で溶ける感触は嫌いだけど、チョコ シフォンなら食べられるって情報を得たのよ」

つまり、なんですか？

これは。

「だから、真潮にお味見してもらおうと思って」

ギャグ漫画なら、確実にここで『ギャフン』って台詞が入るのだから。

でもな、俺は顔を真っ赤にしながら好きなやつのことを語る凧子でも、可愛いと思ってしまっただから。

だから、その『ギャフン』はぐっと飲み込む。

「凧子は森永先輩が好きなんだね」

毎度、毎度、まるで自分の心の鍵を強化するように、その言葉で凧子の気持の確認を取る。

そうしないと、さつきみたいに。

少しの隙間から気持が溢れ出そうになってしまっから。

「うん。好きよ」

。

これでまたしばらく平気だろう。

チョコを手にとって、口に運ぶ。

今年は誰の手にも渡らなかったチョコレートが、俺の体に入っていく。

そのチョコの甘さが、ジンジンと骨の中まで染みいつてくるよう
で。

甘いのに、痛くなった。

キス ホリック（前書き）

「サムシング ブルー」二人の高校編です。
悲恋要素を含む展開です。

キス ホリック

田中 真潮^{ましお}は、私の家の隣りに住む同じ年の男の子だ。

「ねえ、青柳さんって。田中と付き合っているの？」

物理の授業に移動中の廊下で、私の隣りにやって来た椿谷^{つばたに}さんが聞いてきた。

椿谷さんは、バスケもやれば勉強も出来ておまけに美人で有名なお方だった。

クラブも入っていないければ、勉強も好きじゃなくおまけに痩せっぱちの私とは、当然あまり話したこともない。

「田中ってというのが真潮のことなら、付き合っていないよ」
隣りを歩く椿谷さんにそう答える。

「やっぱりね。そうなんだ。じゃあ、田中はフリーってことよね」
満足そうな椿谷さんの口調に、私はむかつときた。

「そんなことは、真潮に直接聞かないと分からないでしょ」
本人のいないところでする会話じゃないって、椿谷さんは頭がいいのに分らないのかしら。

「まあね、本人に聞かないと確實じゃないわよね。でもさ、だったらあなたは田中が誰かと付き合っているって思っているの？」
鋭い切り返して椿谷さんが聞いてくる。

「それは」
そりゃ、真潮が私以外の女と一緒にいるのは見たことがないけどさ。

でも、だからって。

「そんなこと言うんなら、あなたが聞いてよ、田中に。あなただつて気になるでしょ？」

ぐつと言葉に詰まる。

そりゃ、真潮に彼女がいるかどうか、気にならないといったら嘘になる。

「でも」

「じゃ、よろしく」

そう言つと椿谷さんは足早に物理教室に入つていき、先に教室に来ていた先生ににこりと挨拶をして席に向つていた。

週番の仕事をしながら（相手の子は塾とかで放課後の仕事は私が一人でしていた）、階段にある窓から真潮が自転車で帰るのが見えた。

真潮も今日は塾なんだろう。

私には信じられないけど、真潮も勉強が好きな人種の一人のようだった。

真潮は、自転車で学校に来ていた。

朝、遅刻しそうな時は私もたまに（しばしば、かな）後ろに乘せてもらつたりする。

私の、真潮の自転車の後部席の歴史は長い。

初めて乗せてもらつたのは、小学四年生の時だった。

その年の誕生日に真潮がもらった自転車は、私のピンクのそれとは違うタイプの自転車で、とてもオトナの感じがしたのを覚えている。

そしてそれを見て、ああ、真潮は男の子で私は女の子なんだな、やっぱり違うんだな、と思つたのも覚えている。

それは、私にとってはショックなことだった。

やっぱり違うんだ、というのは私にとってはとどめの一発だった。

そして一度『やっぱり違う』と頭の中で針が傾くと、その違いの全てが明らかになり私の目の前に広げられて、提示され、そしてそ

れを自覚することになった。

まずは、学力。

当然、体力。

そして、性格。

とどめが、家族。

その中で一番堪えるのが家族のことだった。

真潮にはお姉さんが二人いた。

お隣りだからその声は良く聞えて、それにお母さんの声も加わると、真潮の家はとても賑やかになった。

テレビの中のホームドラマみたいな家族だった。

懂れた。

私は一人っ子だった。

母はもとから体が弱くて、ようやく生まれたのが私だったようだ。

小さい頃から、うちは母が中心だった。

母の具合によって、家族のいろいろが決まっていた。

いろんな家族があるから、本当にそれぞれなんだけど。

そう思える時と、それを上手く心の中で処理できない時があつて、私は時折気持ちに不安定になっていた。

私が不安定になると、母も不安定になって、父が帰って来るまでの時間がとても長く感じられてしまうこともあった。

でも、真潮と一緒に遊んでいる時は、そのことを忘れられた。

私の家族も真潮の家と同じように明るく楽しく賑やかなんだって、そう自分の心を騙すことができた。

私をそうさせる力が、真潮にはあるように感じた。

母や父が言ってもいない冗談を、真潮にさも両親が言ったかのようには話して笑わせたりした。

そして、そんな風に自分の家族について嘘をついてしまう自分に自己嫌悪を感じたりもした。

こんなことは間違っていると思いつながらも、止められなかった。

そんな時、チョコレートを食べると気持ちが落ち着く時があった。

段々とまるで自己暗示の様に、不安なことがあると私はチョコを買いに行ったり食べたりするようになった。

真潮の新しい自転車を見た日、私はお小遣いを持って近所の駄菓子屋にチョコを買いに行った。

真潮の自転車が、私を不安にさせたのだ。

私の自転車では行けない、そして私が行きたいと思う遙か彼方の明るいつころまで、真潮にはなんの苦勞もなく行けるんじゃないかって思った。

そして、焦った。

真潮に置いていかれたくないと思った。

真潮よりも先に、私は自分の行きたい場所を見つけて行かないといけないって思った。

何でも、真潮よりも先に。

真潮がそんなことに気がつかないよりも、先に。

「真潮」

夕食が終わってから宿題を持って、真潮の家に行く。

宿題だけではなく、お菓子の入った袋も持って。

玄関で真潮のお母さんに挨拶をして紅茶の載ったトレイを受けると、私は二階に上がった。

階段を上がりながら、「真潮、真潮」と名前を呼んだ。

「全く。アンタは、豆腐屋か」

私が部屋の前に行くよりも前に、真潮の部屋の扉が開いた。

「えっ、お豆腐屋さん？ 私は『真潮、いらんかねえ』なんて言っていないし、ラッパも吹いてないよ」

そう言いながらも、真潮のそんな切り返しが楽しくてしょうがな

かった。

「はいはい、ともかくそこは寒いから早く中に入りな」

真潮が手招きをする。

そして、手で前髪をぱつと後ろにやった。

「真潮。前髪が長いねえ」

紅茶を部屋にある小さな机に置きながらそう言った。

「そうなんだよなあ。明日でも切りに行こうかって思っではいるけどね」

「いつそ、角刈りにすれば」

私は、自分の指定席のクッションの上に座る。

「一生言ってる」

そう言いながら真潮も床に座った。

「なにまた、新作？」

私が袋に入ったチョコを持っているのを見て、真潮が聞く。

「うん。食べようよ」

「まずは、勉強してからだね」

そう笑いながら真潮は紅茶を注いでくれた。

宿題と予習が終わったあと、お菓子を食べながら真潮と学校のことを話した。

高校になるとクラスが違っても選択の授業が多いから、あれこれと共通する友達関係なんかがあったりするのだ。

「凧子は、家庭科の授業をとっていたっけ？」

真潮が生チョコを食べながら聞く。

「うん。この間、クリスマスケーキを焼いた」

「そうそう。そう聞いたんだけど、それってどんなの？」

「真潮はきつと嫌いだよ。洋酒につけたドライフルーツがばっちり入ったやつだもん」

「わあ、確かに」

「あれって日持ちはするんだけどね」

「あれ系のケーキって、結婚式の引き出物の中にも入っているよな」

「そうなの？　じゃあ、結婚が長持ちするように、って願いがあったじゃない？」

「いや。それよりも、俺は結婚式場の都合じゃないかと見た」

真潮はそう言つと、紅茶を飲んだ。

結婚、か。

「ま、真潮はさあ」

「ん？」

結婚の前は恋愛つてことで、無理やり話の糸口を見つけた私は、今回の使命（つて、別に椿谷さんに言われたからっていうよりも私が気になるんだけど）をまっとうすべく話を切り出した。

「いたっけ、彼女」

「はあ？」

真潮が、ぽかんと口を開けたまま私を見ている。

「いたっけ？　彼女」

もう一度同じ事を聞きながら、私は苺チョコのついたクッキーをつまんだ。

どっきん、どっきん、心臓が痛いほど体の中で跳ねている。

今まで、どの男の子に告白した時よりもすごい勢いだ。

真潮の顔が見られない。

これじゃあまるで、私は真潮に告白でもしようとしているみたいじゃない。

「……………なんで？」

真潮の低い声が聞える。
やばい。

これはめったにない真潮の怒りモードの声じゃない。

「な、なんでかと言つと」

椿谷さんの顔が浮ぶ。

でも、ここで椿谷さんの名前を出すのはいくらなんでも彼女が気

の毒な気がした。

椿谷さんは真潮が好きなんだろうけど、そのことを真潮に私から言ってもいいんだろうけど、何もこの怒りモードの真潮にわざわざ言う必要もないと思った。

それは少し意地悪だと。

「ほら、私。こうして真潮と一緒に菓子を食べたりとか、朝に自転車に乗せてもらったりとか」

私がそう説明したすと、真潮の顔から怒りが段々と消えていくような気がしてきた。

そしていつもの、穏やかな真潮の顔に戻っていくような。

嬉しくなった。

もし私が犬なら、真潮の前でしっぽをたくさん振っている状態だと思う。

「そうそう、凧子に教科書を貸してあげたりとか、宿題を教えてあげたりとか。もしかして、俺って現代を生きる天使か？」

真潮がそう言って笑った。

「でもさ、アンタが俺に『体操着を貸して！』って教室に殴りこみに来た時には、流石に気絶しそうになったよ」

「だって、あれは。私って、忘れ物をしたらとにかく真潮のところって思ってるもんだから。でもね、言い訳をさせてもらえるなら、真潮に頼みながら自分でも『男子に体操着を借りてどうなる。頼む相手が違うだろう』って気がついたのよ」

今、思い出しても恥ずかしい。

自分のクラスの授業が終わったあと、急いで真潮のクラスに飛び込んでそのことを叫んだら、まだ真潮のクラスは授業中で。

しかもその授業がうちの担任がしていたもんだから、こっちのクラスにまでその話が広まって。

『青柳 凧子は男の体操着を着る女だ』と、しばらくからかわれたものだ。

再び蘇るあの恥ずかしさを誤魔化すように、私はまたクツキーを

食べた。

「つまり、俺に彼女がいたらいろいろと遠慮しようと思
ったわけだ」

「うん」

うん、なんて答えながら私はとても後悔していた。

真潮に彼女がいるってことは、私の生活にも多大な影響を与える
ってことに今さらながらに気がついたからだ。

今まで、真潮が女の子に興味があるとか（だからって、男の子に
興味があるとは思っていなかったけど）あまり考えたことがなかつ
た。

うちの学校は、男女仲はまあいいけど、付き合っている人たちっ
てあまりいなくて。

だからか、余計にそんなことを考えることはなかったのだ。

「彼女は、いないよ」

真潮が言った。

「ふーん」

ふーん、なんて気の無い言い方をしながらも、心の中で私はガツ
ツポーズをしていた。

「そうか、いないの。真潮って、好きな子」

ほっとしながらそう言って真潮の顔を見たら、真潮はヘンな顔を
していた。

あまり見ない表情。

「真潮、悲しい？」

真潮の顔を見ていたら、そんな言葉が出てきた。

「なんじゃ、それ」

そう言って真潮が笑ったので、私もなんとなく笑った。

でも、あの表情は忘れられなかった。

「彼女、いないって」

朝、椿谷さんに会うなり私はそう言った。

椿谷さんは一瞬驚いた顔をしながらも、にこりと笑って「本当に聞いてくれたんだ。イイヒトなんだ。青柳さんって」と言った。

でもそう言いながらも段々と怖い表情になっていって「でもなんか、腹が立つな。青柳さんって」と言うと、側にいたクラスメイトを誘ってトイレに行ってしまった。

昨晚、帰り際に真潮から駅向こうに新しいケーキ屋が出来て、そこはチョコ関係が充実しているらしいけど連れて行ってやるうか、って言われた。

勿論、二つ返事でOKしながらも、少しだけ椿谷さんのことが気にもなった。

気にはなったけど、チョコの魅力の前ではその『気』も二の次になっちゃった。

今日、椿谷さんはかなり感じが悪かったので、OKしてよかったわあ、なんて私は意地悪なことを思った。

けど、その意地悪さの天罰か、放課後に週番だった私は担任に呼び出され、雑用をあれこれと頼まれることになってしまった。

真潮は真潮で、委員会関係の担当分の印刷の仕事が少しあるとかで、お互い早く終わった方が自分の教室で相手を待っているという待ち合わせをした。

「青柳。明日からの体育の産休の先生がいらしてるけど、挨拶していくか？」

用事が終わった私に、担任の先生が言う。

「ええと。はい」

新しい人に会うのは苦手だけど、まあいいやと思い担任の後に続

いた。

職員室の反対の出口の側にあるソファには、大きな男の人と産休になるお腹が大きくなった先生が座っていた。

「先生、明日からお願ひするクラスの一人、青柳ですよ」

担任がそう言つと、大きな男の先生は立ち上がつて「よろしく」と言つた。

そして「青柳つて」とつぶやくと、大爆笑した。

私は何がなんだかわからなくて、呆然とその先生のことを見ていた。

「ああ、青柳さんつて女の子がいて、その子が体操着を忘れたんで彼の体操着を借りようとしてたつて話を今聞いたところだったんで、キミでしょ、その子つて」

またそのネタですかい、と顔を赤くしながらも担任と産休に入る先生を見た。

先生たちも笑っていた。

「いやあ、この青柳とその彼氏の田中は本当にいいカップルだね。いわゆる『ほのぼの系』つてやつですか？」

担任が言つ。

「いやあ、なかなか。青春ですね。羨ましいなあ」

そう言いながら、産休で来た男の先生がにこりと笑つた。

あらま。この先生は、イイかもしれない。

本当だつたら真潮と私がカップル（しかし『カップル』つて）だというのを否定する場面なんだけど、その先生の笑顔が中々素敵なのでついつい忘れてしまった。

ヒットかもよ。この先生。

椿谷さんや、真潮のことでもややもやとしていた気持ちだが、ぱつとそつちに切り替わつた。

ああ、真潮に報告しないと、と思い教室に戻る足取りが軽くなつた。

下校時刻を少し過ぎただけで、どの教室も誰もいなくなってしまう。
っていた。

グラウンドからは体育会系のクラブ人たちの声やボールの音が聞
えていた。

自分のクラスを通り過ぎ、真潮のクラスに着く。

そつと部屋を覗くと、真潮が椅子に座り腕組みをしたまま窓に背
を向けるようにして眠っているのが見えた。

もう、そんなに暖かな日差しとはいえないけれど、真潮の背中に
はそれでもとても暖かそうに太陽が降り注いでいた。

それは、とても正しい姿の様に思えた。

真潮は、優しい。

真潮は、正しい。

そんな真潮に、太陽は良く似合う。

途端に私は、私は真潮にとっては正しくない存在だと思えてきた。

勉強だつて嫌いだし、自分勝手だし。

忘れ物だつて多いし、お菓子ばかり食べているし。

きつと真潮の側には、椿谷さんみたいな人が似合うんだと思う。

椿谷さんは意地悪かもしれないけど、間違いなく真潮のことが好
きで。

おまけに、頭だつていい。

それにきつと家族だつて。

そう思ったら、急に焦ってきた。

真潮には正しい相手がいるのに、私にはいない、と。

真潮に近づく。

長い薄茶色した前髪が目のところまで下りている。

「ばかな、真潮」

私のチョコを買うのに付き合うよりも、自分の髪を切ればいいのに。

ばかりで、優しく、善良な田中真潮は、自分よりも人を優先させる。

そんな真潮の存在が、世界一大切なものに思えた。

ふと、真潮の唇にキスをした。

かする程度の、かすかなキスを。

真潮への気持ちは、とてもシンプルなものだと思っていた。

でも、違うのかもしれない。

好きな男の子は今までもたくさんいて。

ドキドキだっと思っていたし、眠れないほどその人のことを思うことだってあった。

気持ちはいつも、これまたシンプルで、「好き」って気持ちしかなかった。

好き。

好き。

いつも、好き。

真潮に対しても勿論「好き」な気持ちはあった。

友だち。

幼なじみ。

家族ぐるみの御付き合い。

信頼できる人。

真潮は、わざわざ「好き」なんて言葉を言わなくてもいい相手だった。

でも、違うのかもしれない。

でも、それは困る。

そう考えると恐ろしくなった。

そんなフクザツなことは私には向かない。

「好き」って感情はいつもシンプルでいてくれなきゃ。

さつき会った、産休で来た先生に感じた感情を思い起こす。

単純で、簡単で、明るく、楽しい感情。

私にはそれがベストだった。

家族のあれこれを抱えた私には、もうそれ以上フクザツな感情を受け入れるキャパはなかった。

真潮は起きない。

寝息もたてないで眠っている。

誰もいない教室。

「真潮」

私は、次に出てきそうな言葉を心の一番奥底の番外地の冷たい土の中深くに埋めた。

埋めた私でももう掘り出せない程に深く。

「……う、ん」

真潮が目覚めます。

私は、さっきキスした真潮の口を、両手でびゅつと引っ張った。

「うげげっ。な、なに？」

真潮がびつくりした顔で私を見てきた。

「悪い魔女からの消毒でございます」

自分のキスの形跡を消すように、私はそうした。

いててて、なんて言いながら真潮が席を立つ。

そしてそのあと、真潮と二人で私の教室に寄って鞆を取ってから、今日の目的地であるケーキ屋へと向った。

おかしい。

とてもヘンだった。

いくらケーキ屋さんでチョコを買っても、全く心が晴れない。

しかも、私はチョコよりも、何よりももう一度真潮にキスがしたいなんて、そんな不条理なことを考えてしまってもいた。

自転車をこぐ真潮の背中を見ながら私の頭の中には、繰り返しかんなヘンなことが浮んでしまった。

チヨコなんていないから

キスして真潮

たくさんのキス

さっきのみたいなキスじゃなくて

恋人みたいなキスを

真潮

「凧子、具合でも悪いのか？」

黙ったままの私を心配したのか、真潮はそう声を掛けてきた。

「わ、私。実は、またまた好きな人ができそうなんだ」

それは好きな男の子が出来たらいつも真潮に報告してしまう私の、恒例の台詞。

もし今、真潮に「誰？」って聞かれたら、私は『誰』って答えるんだろうって思った。

もし、真潮に聞かれたら。

もし、万が一聞かれたら。

真潮だよ、って言ってみようか。

そう言ったら、真潮はどうするだろう。

私たちは、どうなるのだろう。

好きな人ができそうだ、という言葉聞いて真潮は一瞬間があった後に、「へえ」言った。

そして、「今度は、うまく行くといいな」と言った。

その声も答えも、やっぱり私の幼なじみの優しい真潮のもので。

落胆しながらも、どこか私はほっとしていた。

そして、それが、やっぱり私たちの正しいポジションなんだと思

った。

誰を好きになつて誰と駄目になつてもいいけど。

真潮だけは、離したくないと思つた。

私の心の中にある、好きだとか、恋人になるとか、そういったことを全てと関係のない綺麗な箱の中に、真潮にはいてもらわないといけないと思つた。

だから。

やっぱり、いらない。

欲しくない。

真潮のキスは。

恋人のキスなんて、真潮からは欲しくない。

暗くなつた海沿いの道を、ライトをつけた自転車が真潮と私を乗せて走る。

ゆつくりとカーブを曲がり、自転車はなだらかな坂を下りて行つた。

そのゆつくりとしたなだらかさは、私の中で芽生え喪失していった感情とも似て。

私は、暗闇に紛れて。

真潮の背中で。

……少しだけ、泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7007p/>

サムシング ブルー

2011年4月28日12時40分発行